

## 第7話 サニーの家族

約束の日、ホテルの前の道路で待っていたらサニーはオートリキシャをハイヤーして迎えに来たのです。床屋に行ったのか頭もきれいにし家内には花束をプレゼント。こうした感じはインドはアジアではなくヨーロッパです。

デリーの町を出て30分は走りました。途中で地べたに這うようにして人が住む集落があり、ここかと一瞬息を飲みましたがサニーは運転席から振り返りニヤリと笑うのです。本当にこちらの気持ちを読んでいるのです。結局郊外の町で3階建ての小さなアパートの一間が彼の家でした。奥さんの妹とかアパートの家主の家族とかいろいろ人が集まっています。途中で停電になり天井の扇風機が止まったら、みんなが立ち上がってウチワで僕達をあおいでくれるのです。こっちはすっかり恐縮してしまいましたが、何だかいろいろ心配していたことを申し訳なく思う気持ちで一杯でした。

それから何度もサニーの家には遊びに行きましたが、貧しくて生活は大変なのに子供達の表情の明るいのは驚きました。娘の通う小学校も見に行きましたが、教室は先生だけに机があり子供達は床にノートを置いて勉強していました。校庭に面した教室はドアもなくサニーがのぞいたら娘が飛び出してきて先生も止める風ではありません。そのうち校長先生まで現れ校庭をみんなで話しながら散歩したのですが日本では考えられない光景でした。子供の表情が明るい理由はこういうところにもあるのかもしれない。

サニーの家族、奥さんの妹、子供の友達全部で10人以上でしたがアルワリアのタクシーに乗り込んで（こんなに乗れるかと聞いたらアルワリアは一言、ノープロブレム）食事と映画に行ったときは大変な騒ぎでした。僕達のインド滞在はいつもこんな風に過ぎていったのです。

